

中世と近現代との「対話」

— アンダルス（イスラーム・スペイン）の遺したモノをめぐる議論のゆくえ —

黒田 祐我（神奈川大学准教授）

第二十四回研究会（2018.01.20）

概ね5世紀から15世紀までを包括する中世スペインの約千年にわたる歴史を論ずるにあたって、イベリア半島に居を構えたアンダルスをどのように解釈するかが決定的に重要となる。19世紀から20世紀、そしていま現在にかけて、西欧型の「国民国家」を建設しようとするにあたって、自らの過去と真剣に向き合わざるを得なくなったスペインにとっては、「他者」であり「他者」ではないアンダルスの歴史をどのように理解するかは喫緊の課題となってきたのである。本報告では、このアンダルスの遺したモノ（文字情報・遺構など）をめぐる誕生した歴史解釈をめぐる時代背景を論じた。そして、この解釈と現在の歴史学研究成果との乖離を提示することによって、「中世と近現代との対話」を試みた。

さて、現在に至るまでのスペインの歴史解釈は、19世紀に誕生した3つの「神話」によって構築されたと報告者は考えている。

第一に、16世紀末頃から登場する反スペイン・プロパガンダである「黒い伝説 (leyenda negra)」の影響である。「グロテスクなスペイン」に対する蔑視がスペイン外で維持され、これが19世紀に「異国趣味 (orientalismo)」「アラブ人愛好 (maurofilia)」へと変質するなかで、特にフランスで、アンダルシーアのモーロ人 (ムーア人) の歴史に対する興味が呼び起こされた。これと時期を同じくして、W. アーヴィングの『アルハンブラ物語』(1829年)によって、アンダルスの歴史に対する興味が一気に広がることとなった。

このいわば「外からのアンダルス発見」に続いて、「黒い伝説」を部分的に受容しながら、スペイン人は国民史を模索していった。彼らは当時のスペインの没落の原因を「自ら進んで不寛容・狂信・蒙昧の国と化した」近世の歴史に求める一方で、栄光の時代として中世史を描こうとした。こうして中世の「スペイン人」皆が、祖国を奪還し自由を獲得するために闘争を繰り広げたという、よく知られた「レコンキスタ神話」が誕生したのである。

しかしながら、「レコンキスタ」の敵と位置づけられうるアンダルスの歴史を、スペイン人は「他者」として切り捨てなかった。むしろそれを称揚し神話化することによって、スペイン中世史に一種の捻じれを生じさせることになる。この「アンダルス神話」の構築に関与したアラブ学者らは、アンダルスに花開いた宗教的寛容を強調し、古代ギリシア・ローマの知の継承に果たした役割を最大限強調することで、近代西洋文明の形成に寄与したという歴史的な役割を提示した。いわば、アンダルスは「スペイン化」され、「西洋化」された。

こうして捻じれたかたちで構築されたスペイン中世史を代表するモニュメントとして、本報告

では、最も早く国宝（Monumento Nacional）として登録された建築群を保有する三つの都市（コルドバ、トレード、グラナダ）に着目しながら、現在の歴史学研究成果が呈示する実像と、上記の「神話」が喚起し、いまや定着した感のあるイメージとの乖離を紹介した。

後ウマイヤ朝の宗教的寛容と空前絶後の栄華を誇るトポスとしてのコルドバは、むしろその寛容が損なわれ「イスラーム社会形成」をひと段落させたときに最盛期を迎えている点を指摘した。「レコンキスタ」の偉業と、宗教的寛容の結節点として知られるトレードをめぐる現在の研究成果では、1085年に征服された後に急速にムデハル（残留ムスリム）の文化的貢献が失われてしまっており、いわゆる「十二世紀ルネサンス」における翻訳運動に貢献したのがアラビア語を母語とするモサラベ（アンダルス治下のキリスト教徒）であった点が強調される。そしてアンダルスの滅亡を憂いつつ、近世スペインの宗教的不寛容を予兆するトポスとしての役割を果たすグラナダであるが、実際にはナスル朝社会は境を接するカスティーリャ王国以上に好戦的な特質を持っており、またカスティーリャ辺境領域との政治・社会・文化的接触を繰り返したアブ・ノーマルなイスラーム領域であったことが近年の研究で明らかとなっている。

現在の世界が抱える問題に呼応するかたちで、19世紀から20世紀の歴史のなかで創られた中世スペイン史の解釈が、スペイン国内において揺らぎは始めている。歴史とは、常に研究対象と、研究者の生きる時代潮流との「対話」であり続けるからである。静的な事実ではなく、動的な「事実」からなるインタラクティブな世界史の可能性と必要性を最後に示しながら、本報告を終えた。